

出エジプトの神からイエス・キリストの父なる神へ

鈴木佳秀

はじめに

フェリス女学院創立150周年記念に向け、教育改革の一環としてキリスト教研究所が設立されたことに対し、敬意を表したいと思います。掲げました題は、「出エジプトの神からイエス・キリストの父なる神へ」です。キリスト教研究所の設立ですから、聖書を取り上げるのは、その設立の趣旨にあっているのではないかと思った次第です。そこで、旧約聖書から新約聖書への中心思想の流れについての話題を提供したいと思います。今日、ここで申し上げることは試論であって、結論めいたことを申し上げるつもりはありません。

2017年が、ルターの宗教改革から500周年目になるというので、日本キリスト教団出版局から、日本語の聖書注解書を刊行する企画が数年前に立てられたと聞いています。ルターの宗教改革までは、ラテン語訳聖書が教会の公的な聖書であったことはご存知だと思います。ルターがそれを民衆の言葉であるドイツ語に翻訳したことで、宗教改革が民衆レベルの問題になったと言えます。ルターによるドイツ語訳聖書の刊行を記念する事業として、旧新約聖書の翻訳を行ない、それに基づく注解書を刊行するという企画だと聞いています。

出エジプト記を取り上げるように、わたくしにも声をかけてくださったのです。既に、3年をかけて出エジプト記本文の翻訳を行ない、それに注解を添えるという作業を終え、原稿を書き上げて既に出版社に送ってあります。前職であった学長職の職務の合間をぬって、5分、10分の空き時間を拾い集めるようにして聖書本文の翻訳を行ない、週末の空いている日や、春や夏、正月の休暇を利用して、仕事をし続けてきました。

出エジプト記の翻訳をしながら、改めて、聖書が伝えようとしているメッセージの奥深さに出会い、感動させられましたので、今日は、その一端に触れながら話を進めたいと思います。

I 旧約聖書が掲げる問題提起

A アブラハムの召命が帯びている約束の意義・約束と信仰

旧約聖書が、その冒頭に天地創造物語を置いていることはご存知のことと思います。人間が、被造物として、神の前に生を与えられている存在であると明記している物語です。その創造物語が、アブラハムの召命という記事に繋がられていることに注意を払いたいと思います。人間の創造に続く、神の選びとして語られています。それは祝福を与えるという、いわば救済のための選びであり、神のご計画の中

に含まれるアブラハムの召命なのです（創世記12章1節～3節）。

アブラハムは、信仰的な決断をして、この神の召命に応え、行き先も知らずに故郷をあとにするのです。信仰において応答したアブラハムに、神は、子孫と土地の約束を与えます（創世記15章1節～21節）。ですから、神がアブラハムに与えた約束は、信仰をもって受け止めるべき内容なのです。アブラハムの子孫だからからといって、自動的に約束の継承者となり、約束の地は自分たちのものだということになるわけではありません。アブラハムの約束の継承者には、それを受け継ぐ資格が問われます。アブラハムと同じように、神への信仰が問われるのです。

この点は、パウロが理解し、語っている通りです（ローマの信徒への手紙4章13節～18節）。信仰において受け継ぐべき約束であり、アブラハムを父祖とする民族が、その約束を自動的に継承し、遺産として受け取るといった類の約束ではありません。強調しておきたいのは、純民族主義的な約束の継承という理解はありえないということです。中心は、神のご計画だからです。旧約聖書が掲げている問題提起として、このことを心に留めておいていただきたいと思います。

B 遊牧民で、契約へと召された出エジプトの集団・民族的純血主義でないイスラエル理解

旧約聖書が掲げる問題提起の第二として、出エジプトの共同体が、イスラエルを構成する母体となるということを強調しておきたいと思います。聖書を創世記から出エジプト記に読み継いで参りますと、なぜイスラエルの子らがエジプトの地にいるのか、ということが分かるようになっていきます。創世記の末尾に、ヨセフ物語が置かれているからです（37章以下）。その内容については、時間の関係でここでは省略させていただきますが、ヨセフの言葉からも分かるように、彼らが遊牧民であったことに注意を払いたいと思います（創世記46章28節～34節）。遊牧民として、彼らはエジプトに下ってきたのです。その集団が、ゴシェンの地に定住するに至ります。

アブラハムの召命と信仰ということを最初に問題にしましたが、遊牧民の信仰とはどのようなものでしょうか。後に、イスラエルの民は約束の地カナンに定住するに至ります。そこで、定住民の神理解と対立・緊張の関係に入ることとなります。定住民の信仰と、遊牧民の信仰とは同じではありません。そもそも、神についての捉え方、神へのアプローチの仕方、つまり神礼拝の発想が異なります。

これはM. ヴェーバーが『古代ユダヤ教』で強調していることですが、二つの神理解の食い違いが、イスラエルの歴史を織り成すことになるのです。旧約聖書が問題として提起している大きな前提が、遊牧民と定住民との文化の差なのです。簡潔に説明をしますと、遊牧民の神は人的共同体の神ですが、定住民の神は地域共同体の土地の神なのです。

定住民の神理解は、その地域の中心にある聖所や神殿に住まわれる神を礼拝することが中心で、その神が聖所や神殿に降りてくる、あるいはそこに住まうことによって、その地域住民は神の恩恵に与るのです。定住民の至福を保証する神がいることで、その地域住民には豊穡と多産が与えられるのです。彼らにとりまして、地域の中心にある聖所や神殿に宿り給う神は土地の神であり、その聖所や神殿では、豊穡と多産を願った儀礼が執り行なわれます。つまり彼らの生活に関わる重要な儀礼を、儀礼的な訓練を受けた正規の祭司たちが執り行なうのです。

他方、遊牧民は、広大な土地に点在している牧草地を巡回しながら、ラクダを伴い、小家畜を放牧さ

せながら移動していく、そうした生活を送る人々です。数年をかけて、牧草地を一巡して戻ってきます。天幕とともに、数多くの羊や山羊の群れを追いながら遊牧する民にとって、牧草地や泉が何よりも重要です。彼らは、一つの場所に定住することができないのです。一つの場所に居続けると、牧草がなくなってしまう。そうすると、家畜や小家畜は絶滅してしまいます。飼っている小家畜に依存している遊牧民も、死に絶えてしまいます。彼らの神は、この群れと共に移動する、人間と家畜を守る神なのです。その意味で、牧草地や水源、そして群れの多産を保証してくれる神なのです。遊牧民にとって、一つの場所にある聖所や神殿は意味を持ちません。数年に一度訪れるような霊験あたたかな場所は、彼らの生活を保証する場所にはならないのです。遊牧民の神は、ですから人的共同体の神だと定義されるのです。彼らが神に犠牲を捧げ、祈りを捧げるのは移動の途中であり、責任者である家父長が代表して、簡素な犠牲を捧げるのです。正規の祭司ではありません。

定住民にとって、神に犠牲を捧げ、祈りを捧げるのは、例えて言えば、公衆電話のある場所に出向いて、神様に電話連絡をするといった形をとります。他方、遊牧民は公衆電話では役に立ちません。彼らはどの場所からも連絡ができる携帯電話で、神様に電話連絡をするという形になります。これくらい神様へのアプローチが違うのです。

この礼拝様式と申しますか、犠牲を捧げる際のアプローチの食い違いが、イスラエルの歴史に影を落としているのです。このアプローチの違いは、共同体そのものの理解をめぐる、食い違いを生むからです。少し寄り道をしましたが、出エジプト記に戻りたいと思います。

さて、聖書によれば、出エジプトを行なった人数が、壮年男子だけで60万人を超えていたというのです（出エジプト記12章37節～38節）。子供達や女性を加えると100万人をはるかに超える人数が、エジプトから脱出したことになります。歴史的事実を語っているのが聖書であると信じている人にとっては、その数字に何の疑問も持たないかもしれません。ですが、聖書を編纂した人々の歴史を見る見方は、現代人のそれとは異なります。また彼らの発想は、歴史に客観的事実を求めるといふ発想とも異なっていました。

具体的に申しますと、例えば120万人がエジプトを脱出して、シナイ半島に向かったとすれば、家畜の群れを含めた彼らを支えるだけの水源はありませんし、牧草地也没有。物理的には、ほとんどの人が死に絶えるのは確実です。客観的で物理的なことだけに目を止めてしまうと、聖書の記述に疑問を抱かざるをえなくなります。

古代イスラエルの人々が、どのような観点で歴史的出来事を見ていたのかを知っていただくため、指摘しておかなければならないことがあります。歴史とは子供たちに伝承されるべき告白の主題であったこと、それが重要です。それを裏付ける聖書を引用したいと思います（申命記6章20節～25節）。

将来あなたの子があなたに問い質し、「われわれの神ヤハウェがあなたがたに命じた証と掟と定めはどういうものですか」と言うとき、あなたはあなたの子に言わなければならない。「われわれはエジプトでファラオの奴隷であったが、ヤハウェは強い手をもってわれわれをエジプトから導き出し、われわれの目の前で、エジプトに、[すなわち]ファラオとそのすべての家に大いなる禍々しい徴と奇蹟をもたらし、われわれをそこから導き出したのである。ヤハウェがわれわれの先祖に

誓った地に導き入れ、〔それを〕われわれに与えるためであった。そしてヤハウェは、これらすべての掟を行なうようにわれわれに命じたのである。われわれが、われわれの神ヤハウェを畏れ、生涯にわたってわれわれに幸いが臨み、今日あるように、われわれが生き長らえるためである。ヤハウェが命じた通り、われわれの神ヤハウェの前で、このすべての戒めを守り行なうならば、それはわれわれにとって義となるであろう。』（個人訳）

出エジプトの出来事を、数世代の後に、数百年後に生きている世代であっても現代人であっても、それを自分たちの歴史、つまり「われわれの歴史」として告白するのです。歴史を伝承する意味の中心にそれがあつたのです。歴史は、神の御業を告白するものだからです。引用しました伝承でも、親と子の間での対話なのに、「われわれ」という言い方で歴史の告白がなされています。そのことに注意を払っていただきたいと思います。

ですから、聖書本文を編纂した者たちの意識では、120万人という数は、告白している世代の人の総数にあたると思っていただいても結構なのです。この出エジプトの出来事を告白することは、編纂した時代の人にとって、今この時、生を与えられている「われわれ」全員でエジプトを脱出したという意識で告白する、それが極めて重要であつたのです。歴史的出来事が、そのことで本質的な意味を帯びていたのです。ユダヤ人の家庭では、現代でも、エジプトを脱出した時の過越の祭（出エジプト記12章43節～51節）を、自分たちの歴史として、聖書本文が語る通りに祝っています。

もう一つ注意を払っていただきたいことがあります。出エジプトを行なった人々は、民族主義的な純血主義で構成されていないことです。「種々雑多な人々もこれに加わつた」（12章38節）という言葉がありますが、それが大切なのです。イスラエル十二部族の構成員として皆さんは出エジプト記をお読みになるかもしれませんが、民族主義的な理解をここで述べているのではないのです。

申命記によればエジプトから導き出された民である「あなた」と、出エジプトを実現された神は、契約を結ぼうとされます（申命記26章16節～19節）。

今日あなたの神ヤハウェは、これらの掟と定めを行なうようにあなたに命じた。あなたはあなたの心を尽くし、精神を尽くして、それらを守り行ないなさい。

今日あなたはヤハウェに願って、あなたの神となるとの言明を得た。あなたがその言葉に従って歩み、その掟と戒め、定めを守り行ない、その声に聞き従うためである。

今日ヤハウェはあなたを促し、あなたに約束した通り、あなたはヤハウェの宝の民となるとの言明を得た。あなたがそのすべての戒めを守り、〔ヤハウェがあなたに〕約束した通り、創造したすべての国民の上あなたを置き、賞讃と名声と栄光を与え、あなたをあなたの神ヤハウェの聖なる民とするためである。（個人訳）

モーセが契約の仲保者となって語っています。後に十戒でも触れますが、エジプトから導き出された民に「あなた」と呼びかけていることにご注意ください。どの人であれ、契約を結ぶ対象として、分け隔てなく、イスラエルの民として呼び出されているのです。改めて申し上げるまでもありませんが、純

民族主義的な理解がここにあるわけではありません。

C 国家宗教の挫折による出エジプト伝承への回帰・定住民の文化である神殿の功罪と国家守護神の偶像化

エジプトから導き出された民は、カナンの地に入り、様々な経緯を経て、ダビデの時代に国家を形成します（前2000年頃）。それは、遊牧民であった出エジプトの民が、約束の地に定住化したことを意味しています。カナンの定住民を征服した（聖絶した）という形でヨシュア記、士師記は語りますが、それはカナン土着の民の固有のアイデンティティを抹消せしめ、行政的に、彼らをイスラエル化したことを意味します。国家は、すでに民族主義的な枠組みを越えていました。むろん伝統的な部族内では、遊牧民の伝統を継承する家もあったでしょうし、父祖の歴史を告白しつつカナンの地に定着した民もいたはずです。

しかし、そうした個人の感覚では束ねきれない国家組織が誕生したのです。出エジプトの神は、歴史のただ中において民を解放し、救済した神ですが、神がアブラハムに与えた約束に微妙なズレが生まれることとなります。奴隷状態から救い出された神の民（選ばれた民）という理解と、約束の地を守りそれを維持する民という理解との間で、その境目があいまいになるという事態を招きます。その理由は、イスラエル起源でないエルサレムの祭司門閥であるツァドク一族を、国家の中枢に据えたことと絡んでいます（サムエル記下5章6節～12節、8章17節、15章24節～29節、列王記上1章38節～40節、4章1節～6節）。また後に触れますように、ソロモン王が国家の神殿を建設し（列王記上9章1節～9節）、部族の伝統であった契約の箱を、その中に収めたこととも絡んでいます（サムエル記下6章1節～19節、列王記上6章19節）。

王国の成立と神殿の建設は、出エジプトの神が国家守護神へと読み替えられる危険をもたらしました。非イスラエルのイェブス人の都市国家エルサレムの守護神は、エル・エルヨーン（「至高なる神」の意）で、都市エルサレムの守護神でした（創世記14章18節）。イスラエル起源の文化ではありません。この首都の守護神と、出エジプトの神ヤハウェとが同一視された結果（サムエル記下22章14節）、何が起こったのか。遊牧民の神理解でなく、定住民の神理解の方が優位に立ったことは言うまでもないことです。

王国の歴史はサムエル記から列王記まで綴られています。その歴史を編纂したのは申命記史家（申命記学派）と呼ばれる人たちです。彼らは紀元前587年に王国が滅亡した時点から遡って、王国の歴史を、まさに告白するという姿勢で歴史書を編纂しているのです。その中心思想は、王国は契約違反のゆえに滅びたという、告白としての歴史です。失敗の歴史だと告白しているのです。ソロモン王は、エルサレムに神殿を建立しますが、警告を受けています（列王記上9章6節～9節）。またソロモン王は他国の女性を数多く側室として受け入れたことが記され、それが国家の中枢部に異教の文化を導入する結果をもたらした、と批判されています（列王記上11章1節～13節）。

列王記を読みますと、歴代の王たちがヤハウェ以外の神々にひれ伏したことが、滅亡の原因として語られています。簡単に申しますと、彼らは、奴隷の家から解放した出エジプトの神を忘れたのです。国家守護神として相応しい神ないし神々を、王たちは求めたのです。豊穡と多産、また外敵からの平和を求めた為政者の立場があったとしても、神殿では、「現人神」なるファラオの奴隷であった境遇から救

い出した神を祀るという目的を、本来は帯びていたはずで。

しかし、エルサレム神殿では、最終的にヤハウエ祭司以外の祭司（列王記上2章26節によれば、アビアタルは追放されている）、つまり非イスラエルのエルサレム在住のイェブス人の祭司団（ツァドク祭司団）が、儀礼を執り行なうに至りました。日常の儀礼では、エジプトからの脱出という歴史とは関わりなく執り行なわれたでしょうし、奴隷状態からの解放という救済の歴史は、積極的には何の役割も負わされていなかったと言わなければなりません。宗教儀礼と国家による支配が結びついたところから、奴隷状態からの救済という理解は忘れられる危機にあったのです。

この国家主義的な舵取りに対し、預言者たちは幾度も警告し、神からの言葉を預言として語りました。その一例として掲げるのは、ホセア書からの引用です（13章9節～11節）。彼は、前721年の北イスラエル王国滅亡の時代に生きた預言者でした。

イスラエルよ、お前の破滅が来る。
わたしに背いたからだ。
お前の助けであるわたしに背いたからだ。
どこにいるのか、お前の王は
どこの町でも、お前を救うはずの者
お前を治める者らは。
「王や高官をわたしにください」と
お前は言ったではないか。
怒りをもって、わたしは王を与えた。
憤りをもって、これを奪う。（新共同訳）

前587年にユダ王国が滅び、国家が消滅した後、第三イザヤと命名されている無名の預言者も、イザヤや第二イザヤの伝統を受け継ぎつつ、出エジプトの神を忘れたことが滅亡に至った原因であると語っています（イザヤ書63章11節～14節）。

そのとき、主の民は思い起こした
昔の日々を、モーセを。
どこにおられるのか
その群れを飼う者を海から導き出された方は。
どこにおられるのか。
聖なる霊を彼のうちにおかれた方は。
主は輝く御腕をモーセの右に伴わせ
民の前で海を二つに分け
とこしえの名声を得られた。
主は彼らを導いて淵の中を通らせられたが

彼らは荒れ野を行く馬のように
つまずくこともなかった。
谷間に下りて行く家畜のように
主の霊は彼らを憩わせられた。
このようにあなたは御自分の民を導き
輝く名声を得られた。
どうか、天から見下ろし
輝かしく聖なる宮から御覧ください。
どこにあるのですか
あなたの熱情と力強い御業は。
あなたのたぎる思いと憐れみは
抑えられていて、わたしに示されません。
あなたはわたしたちの父です。
アブラハムがわたしたちを見知らず
イスラエルがわたしたちを認めなくても
主よ、あなたはわたしたちの父です。
「わたしたちの贖い主」
これは永遠の昔からあなたの御名です。(新共同訳)

旧約聖書が提起していることは、一つは、アブラハムに与えられた召命と信仰の問題、一つは、奴隷状態から導き出されたイスラエルは、契約に基づき、戒めを守るべく呼び出された「あなた」である、その自覚へと召されていること、一つは、出エジプトの神を忘れ、神を国家守護神とみなしたことが、国家が滅びる原因であったということ、これらが旧約聖書の掲げる重要な問題提起であると思われます。

国家が滅亡し捕囚になった民は、皮肉なことに、定住民の生活から、遊牧民であったころのメソポタミアへ奴隷として連行されます(列王記下17章5節～6節、24章10節～16節等)。それは、出エジプトの神を忘れたからであると、旧約聖書は問題を総括しているのです。

II 出エジプト伝承が帯びている意義

A モーセの召命における神の顕現・神ヤハウェによる救済の意思と選び

旧約聖書の中でもっとも重要なのが出エジプト伝承であることについて、概説的に語って参りましたが、この度、出エジプト記を翻訳して教えられたことがあります。そのことを、第二部の冒頭でお話をしたいと思います。出エジプト記3章9節～12節について、新共同訳と個人訳を併記して取り上げます。

この箇所は、モーセが神からの召命を受ける場面です。要点は、神がモーセに語りかけた、12節の言葉です。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである」と新共同訳では訳されています。わたくしの訳では「わたしはあなたと共にあろうとする。あなたにとつ

て、わたしがあなたを遣わすしるしがこれである」となっています。

原文で使われている動詞の「ある」あるいは「あろうとする」は、エヒイエです。ハーヤーという存在を意味する動詞の未完了形一人称男性単数形です。新共同訳は「わたしは必ずあなたと共にいる」として、「必ず」という補いを入れて強調しています。しかし、神の動的な強い意思がこれで表現されているとは思えないのです。原語の動詞の形には、発話者の強い主体的な意思が表されているので、強い能動的な働きかけ、不退転の決意が意味されているとわたくしは考える次第です。

この時に、神が、モーセに対して「あなたにとって、わたしがあなたを遣わすしるしがこれである」と語っているのですから、「わたしはあなたと共にあろうとする」という言葉は、モーセと共にあって活動する、つまりモーセと一緒にあってイスラエルの民を救い出すのだという、主体的で、積極的な、決然とした神の意思を語っています。それは、これから行なわれる出エジプトという一大事業に、ただそばにいるというに留まらず、モーセの生涯を包み込むように、どのような場所でも常にモーセと共に行動するという、強い決意が込められている言葉だと理解している次第です。

B ヤハウェとしての神の顕現と救済意思の告知・出エジプトにおける神の意思

この同じ動詞が、3章14節でも使われているのです。14節前半は、伝統的に、どう訳すかで大きく揺れています。原文はエヒイエ アシェル エヒイエという三語です。これまでは、13節でモーセが神の名を尋ねて「ご覧下さい。わたしはイスラエルの子らのところに参ります。しかし、あなたがたの先祖の神がわたしをあなたがたに遣わされましたと彼らに言った時、彼らはわたしに『その名はいったい何と言うのか』と尋ねます。わたしは彼らに何と答えるべきでしょうか」と発言しているのです。それに対して、実際に神が答えているのは15節なのです。しかしながら、14節には名前の告知があるという前提で、海外でも日本でも、歴史的に様々な訳の試みがなされてきました。14節にはモーセの問いへの応答がある、という前提で読まれてきました。そこで、わたくしの訳を紹介しておきたいと思います。

神はモーセに言われた。「わたしはあろうとして、わたしはあろうとする」。更に言われた。イスラエルの子らに、あなたはこう言いなさい。「〈わたしはあろうとする〉が、わたしをあなたがたのところに遣わされたのだ」と。(個人訳)

エヒイエについては先ほど述べた通りですが、間にあるアシェルは関係代名詞です。関係代名詞ですから、人は、先行詞があるものとして訳そうとするのです。でもそれに相当する名詞も、その他の要素もありません。ですから翻訳に困ってしまい、皆、しばしば補いの言葉を添えて翻訳してきたのです。それも、名前の告知という形に整えなければならないと、感じていたようです。

例えば邦語訳聖書の訳を紹介しますと、文語訳聖書は「我は有て在る者なり」で「我有といふ者、我を汝らに遣したまふ」、口語訳は「わたしは、有って有る者」で「『わたしは有る』というかたが、わたしをあなたがたのところへつかわされました」となっています。新共同訳は「わたしはある。わたしはあるという者だ」で「『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだ」で、関根正雄訳は「わたしはあらんとしてある者である」で「〈わたしはある者〉がわたしを君たちのもとに遣わ

された」となっています。英語の聖書も一つ紹介しておきますと “I am who I am.” “I AM has sent me to you” (NRSV) です。

神は強い意思を宣言した上で、それを「あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であるヤハウェが、わたしをあなたがたのところに遣わされた」(個人訳)と15節で告知しているのです。「エヒエ」という一人称単数形による強い意思の宣言が、三人称単数形となって「ヤハウェ」となっているのです。つまり、神は「エヒエ」という強い意思をもってイスラエルの民に関わろうとする宣言であり、その意思を言い表した名前の啓示であることを物語ります。

従いまして、ヤハウェなる意思を表明した神の顕現は、民を救済するという強い意思の表明であり、そのために、この時に、モーセを召し出したという不退転の決意を語るものと言えます。このヤハウェとしての名の顕現は「これが永遠にわたしの名であり、これが世々に続くわたしの呼び名である」(15節、個人訳)とありますから、イスラエルの民に対する想い、付き添うかのように、自由を求めて脱出する者たちと共に旅をしようとする、そうした決意を表明した神の名であることになります。人間的な言い方を赦していただけるならば、片思いのような想いが、イスラエルの民に対する強い愛が、ほとぼしり出ている、そういう名であることに間違いはありません。

C 出エジプトの民と十戒・神の前に立つ出エジプトの民に向けられた召命の呼びかけ

これほどの神ヤハウェの強い意思で、エジプトの奴隷の家から導き出した民に、神がモーセを通して与えたのが、戒めなのです。戒めは、奴隷状態のただ中では大きな意味を持たなかったものですが、神によって呼び出され、解放された民に向けた言葉であることが重要なのです。そこに「共にあろうとする」神の想いが込められているからです。

「あなた」と呼びかけられているのは、奴隷の家から解放された本人ひとりひとりです。神からの呼びかけにどのように応答するかが、問われる様式です。代表的な例として、十戒を掲げておきました。十戒は、いわゆる法律的な、戒律ではないことを最初に申し上げておく必要があります。古代メソポタミアの法律集では、規定はすべて三人称で記されています。ではなぜ、旧約聖書の律法、戒めや掟、定は、二人称で語られているのか、と問うことは重要です。旧約聖書は、モーセを媒介にしつつ、聞き手に、あるいは読み手に、出エジプトの神が語りかけているのです。それも、先ほど告白としての歴史理解について触れましたが、神が直接十戒で呼びかけているのは、奴隷状態から解放され、自由を与えられた「あなた」なのです(出エジプト記20章1節～17節)。

十戒の前文が重要です。「わたしはあなたの神ヤハウェ、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したものである」(個人訳)と、自己紹介的に神ヤハウェが宣言し(2節)、その上で「あなたには、わたしをおいてほかに他の神々があってはならない。あなたは自分のために像を作ってはならない」と語りかけているのです(3節～4節・個人訳)。自主的な、自発的な応答を求めた言葉であって、いわゆる絶対命令ではないのです。

十戒の中でも有名な戒めを取り上げてみましょう。「あなたは殺してはならない。あなたは姦淫してはならない。あなたは盗んではならない。あなたはあなたの隣人に対して偽証をしてはならない。」(20章13節～16節・個人訳)。新共同訳は「あなた」を省略しています。十戒のどの条文も、前文を前提に

しないと、呼び出されているという感覚が薄くなり、単なる倫理的な戒めになってしまう可能性が残ってしまいます。これらは倫理的な命令ではありません。

聖書の中には、「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証をするな」という訳を与えているものもありますが、この否定命令はある意味で誤訳になります。ヘブライ語には否定命令形がないからです。ヘブライ語動詞は、完了形と未完了形に分かれ、命令形や不定詞、分詞形はありますが、近代語のような現在形はありません。また、絶対否定を表現する否定命令形がそもそもないのです。この部分は動詞の未完了形に、否定辞がついている形の、二人称単数形なのです。これを禁止命令、禁令と呼び習わしておりますが、日本語に訳するのが難しい言葉です。文語訳は「汝殺すなかれ」と訳していますが、英語の聖書も“You shall not kill.”のように、shall notという言い方をしています。Do not killではないのです。

あえて訳すならば、奴隷の家から解放されたその「あなたが殺すはずがない」という意味合いなのです。未完了形には、行為がまだ未完了の状態にある現状をも言い表す文法要素がありますから、それを生かすならば、奴隷状態から解放された「あなたは殺さない」という訳も可能なのです。「あなた」と呼びかけられている本人は、解放され、自由を与えられて、今、出エジプトの神の前に立っているのです。畏れと慄きをもって、ヤハウェなる神の御前に立っているのです。

この状況設定は、時代を超えて、どのような場所で生きているにせよ、この神の前に立っているという自覚で、十戒の一つ一つを読むことを求めているのです。一部の例外を除いてですが、聖書に出てくる律法のほとんどが、この精神で編纂されています。

強調しましたように、出エジプトの神が、いかに旧約聖書のメッセージ全体に本質的に深く関わっているかを、ご理解いただけたかと思えます。

Ⅲ アブラハムの宗教と出エジプトの神

A 出エジプト伝承のないアブラハムの宗教であれば・救済史のない宗教は神殿を媒介とした国家主義へ：遊牧民の伝統から定住民の伝統へ

旧約聖書の本質に関わることをこのような形でお話してきましたが、その問題提起をさらに一歩進めてみたいと思います。それは、アブラハムから続く宗教意識について、次のように問いを立ててみたいと思うからです。出エジプト伝承がなかったとすれば、古代イスラエルの宗教意識は、どのような形を取ったであろうか、という問いです。つまり、エジプトの奴隷状態の身分から解放され、自由が与えられて、救済されたという宗教意識がなかったとすれば、約束の地であるカナンに定住した民は、どのような神理解を持ったか、という問いです。恐らく、定住民の宗教意識に吸収されてしまったでしょう。

それは、神殿を中心に集まる共同体となり、国家組織を持つに至り、その宗教意識は間違いなく国家主義への道、国家宗教となる道を辿ることを意味しています。アブラハムから続く遊牧民の伝統は、定住民の伝統の中に吸収され、恐らくは消滅したと言えるでしょう。神殿中心主義の国民支配というイメージが浮かびます。族長のヤコブは、アブラハムの孫にあたりますが、彼はベテルの聖所を創設する形で伝承されています（創世記35章9節～15節）、このヤコブが息子たち一族と共に、ヨセフを頼ってエジプトに赴いたことはすでに触れました。

B 国家守護神化された神と王国の滅亡・出エジプトの神との契約が忘れられた結果

出エジプトの神が忘れられ、宗教が国家宗教に、神が国家守護神の装いを帯びつつあったことを、言葉尽くして批判し、神からの警告の言葉を伝えたのが、預言者たちでした。彼らは間近に迫っている滅亡を実感していたからです。預言者は、神の言葉を預かる者で、対象である王や民にそれを語った人です。預言者は、神のメッセンジャーなのです。彼らが「ヤハウェはこう言われた」といって語り出す言葉（アモス書1章3節、6節、9節、11節、13節、15節等）は、自分が聞いた神の一人称発言による言葉です。神からの言葉をじかに聞かされた預言者は、語らずにおれないという意識で、実際に語ったのです。

エレミヤが語った言葉に聞いてみたいと思います（7章1節～11節）。

主からエレミヤに臨んだ言葉。主の神殿の門に立ち、この言葉をもって呼びかけよ。そして、言え。「主を礼拝するために、神殿の門を入れて行くユダの人々よ、皆、主の言葉を聞け。イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行いを正せ。そうすれば、わたしはお前たちをこの所に住まわせる。主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。そうすれば、わたしはお前たちを先祖に与えたこの地、この所に、とこしえからとこしえまで住まわせる。しかし見よ、お前たちはこのむなしい言葉に依り頼んでいるが、それは救う力を持たない。盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、知ることのなかった異教の神々に従いながら、わたしの名によって呼ばれるこの神殿に来てわたしの前に立ち、『救われた』と言うのか。お聞たちはあらゆる忌むべきことをしているではないか。わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巣窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。」（新共同訳）

神が国家守護神化され、神殿が神格化されている事態がみて取れます。「主の神殿」というお題目は、出エジプトの神が忘れられ、その救済の歴史が形骸化してしまったことを暗示しています。それは神の偶像化そのものです。バアルというヘブライ語は「主人」という意味であり、主人なる神という場合、それが異教の神であるのか、それともヤハウェのことであるのかが混同されてしまっている、そのことを物語ります。

またエレミヤが告発している事態は、契約違反そのものです（11章1節～11節）。

主からエレミヤに臨んだ言葉。「この契約の言葉を聞け。それをユダの人、エルサレムの住民に告げよ。彼らに向かって言え。イスラエルの神、主はこう言われる。この契約の言葉に聞き従わない者は呪われる。これらの言葉はわたしがあなたたちの先祖を、鉄の炉であるエジプトの地から導き出したとき、命令として与えたものである。わたしは言った。わたしの声に従い、あなたたちに命じるところをすべて行えば、あなたたちはわたしの民となり、わたしはあなたたちの神とな

る。それは、わたしがあなたたちの先祖に誓った誓いを果たし、今日見るように、乳と蜜の流れる地を彼らに与えるためであった。」

わたしは答えて言った、「アーメン、主よ」と。

主はわたしに言われた。「ユダの町々とエルサレムの通りで、これらの言葉をすべて呼ばわって言え。この契約の言葉を聞き、それを行え。わたしは、あなたたちの父祖をエジプトの地から導き上ったとき、彼らに厳しく戒め、また今日に至るまで、繰り返し戒めて、わたしの声に聞き従え、と言ってきた。しかし、彼らはわたしに耳を傾けず、聞き従わず、おのおのその悪い心のかたくなのままに歩んだ。今、わたしは、この契約の言葉をことごとく彼らの上に臨ませる。それを行うことを命じたが、彼らが行わなかったからだ。」

主はわたしに言われた。「ユダの人とエルサレムの住民が共謀しているのが見える。彼らは昔、先祖が犯した罪に戻り、わたしの言葉に聞き従うことを拒み、他の神々に従ってそれらを礼拝している。こうしてイスラエルの家とユダの家は、わたしが彼らの先祖と結んだ契約を破った」。(新共同訳)

古代メソポタミア以来の伝統で、古代イスラエルでも、人々は神の名において誓う時に、必ず、自己呪詛の言葉を口にして誓約をしたのです。旧約聖書にも、「神が幾重にもわたしを罰してくださるように」という言葉が残されています(サムエル記下3章35節、列王記上2章23節)。神の名によって誓う時に、誓った自分が、それを裏切るような過ちを犯したならば、その罰は、誓約した自分に降りかかりますようにという意味です。従って、契約を締結する時に、祝福と同時に呪いの言葉が発せられたのです(申命記28章)。

契約違反は、自らの責任において、呪いの事態を招き寄せることを意味していました。預言者エレミヤの警告は、そこに向けられています。契約は、モーセを媒介にして民と出エジプトの神ヤハウェとの間で結ばれたものです。契約違反は、モーセに対し「わたしはあろうとして、わたしはあろうとする」と顕現されたその神の想いを、ふみにじるものとなるからです。出エジプトの神がひたむきに愛を注がれた民でしたが、彼らはそのヤハウェの心を忘れ、それをふみにじるように多神崇拝に走ったのです。

C メシア預言におけるインマヌエル思想・われらと共にあろうとする神からの告知

個人的には、イザヤに告知されたメシア預言、特にインマヌエルという呼び名を通して、これまでずっとイスラエルの神を理解してきました(イザヤ書7章14節、9章5節)。インマヌエル「神は我々と共におられる」(マタイによる福音書1章23節)という言葉、共に存在してくださる共生の神という観点で受け止めてきました。しかし「おられる」は補いなのです。インマヌエルというこの言葉の原語表記は、「神我々と共に」でしかありません。「おられる」に相当する「エヒエ」は付いていません。

この言葉にも、「あろうとする」という神の意思を読み取る必要があると思うようになりました。ここでも、「神は我々と共にあろうとする」と補って読むことが求められているのではないのでしょうか。神は静的な存在としてわれわれと共にいるという意味でなく、より積極的にわれわれに働きかけ、われわれの生き方に深く関わろうとされる神であること、そのことを意味しているのではないかと思う次第

です。

これは意識ですが、いままでの訳とは全く違うイメージで、メシア預言を読むことができるのではないのでしょうか。出エジプトの神ヤハウェが忍耐をもって呼びかけておられたことは、アモスの預言からも知られます。アモス書4章10節～12節では、彼は次のように、神ヤハウェの想いを告知しています。

かつて、エジプトを襲った疫病を
わたしはお前たちに送り
お前たちのえり抜きの兵士と
誇りとする軍馬とを剣で殺した。
わたしは陣営に悪臭を立ち上らせ
鼻をつかせた。
しかし、お前たちはわたしに帰らなかったと
主は言われる。
かつて、神がソドムとゴモラを覆したように
わたしはお前たちを覆した。
お前たちは炎の中から取り出された
燃えさしのようにになった。
しかし、お前たちはわたしに帰らなかったと
主は言われる。
それゆえ、イスラエルよ
わたしはお前にこのようにする。
わたしがこのことを行うゆえに
イスラエルよ
お前は自分の神と出会う備えをせよ。(新共同訳)

神の御心は、イスラエルの民が立ち帰ることを、ただひたむきに求めているのです。神のひたむきな愛はかくも強く、そして待ち続ける神の御心が、預言者アモスによって語られています。しかしイスラエルは、神ヤハウェに立ち帰らなかったのです。王室も、国家守護神としての形式的な神礼拝は続けていたでしょう。数少ない王のみが、出エジプトの神に立ち帰ることはありましたが（例えば列王記上15章9節～24節のアサ、22章41節～51節のヨシャファト、下18章1節～20章21節のヒゼキヤ、22章1節～23章30節のヨシヤ等）、国家は滅亡へと突き進んでしまったのです。

IV 神の愛を証言する新約聖書の世界へ

A ヨハネによる福音書、ヨハネの手紙における神の愛・ひたむきに人間を愛される神

旧約聖書が掲げている問題提起を、新約聖書はどのように受け止めたのでしょうか。これが最後の問

いかけになります。他の福音書を度外視するものではありませんが、思想的に、旧約聖書の問題提起をより深く受け止めているのは、あくまで個人的な考えですが、ヨハネによる福音書であり、ヨハネの手紙だと思っております。

出エジプトの神ヤハウエが、まるで片思いをするかのように、ひたむきに愛してこられたというそのメッセージを、正面から受け止めているのが、ヨハネによる福音書3章16節～17節であると思えてならないからです。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。(新共同訳)

旧約聖書を読み進める立場から見ると、この言葉が染み入るように響いてきます。神様ご自身が、自己犠牲をもって民を贖おうとされたからです。またヨハネの手紙に記された言葉にも、注意を払いたいと思います(ヨハネの手紙一4章7節～12節)。

愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべてなされているのです。(新共同訳)

B 人間を救う神の愛

主なるイエス・キリストを通して、どのような救済の道が開かれたのかを、ローマの信徒への手紙8章1節～11節にあるパウロの言葉から見てみたいと思います。

従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした。肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対して

おり、神の律法に従っていないからです。従えないのです。肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。(新共同訳)

律法だけでは、人の魂は救われないことを明言しています。律法を与えた出エジプトの神の御旨は、それを形式的に守ることで神礼拝は充足すると考えた人々によって、裏切られてきたからです。出エジプトの神の熱い想いは、聞き手に理解されなかったのです。彼らは、主体的にまた自主的に応答し、ヤハウェなる神に立ち帰ることをしなかったからです。

C 出エジプトの神からイエス・キリストの父なる神へ

原典の翻訳を通して、ヤハウェなる神の「わたしはあなたと共にあろうとする」という強い意思の啓示に接すると同時に、これまでとは全く違ったイメージで、出エジプト記のテキストを読むことができました。深く感動しました。驚きでした。神ヤハウェは、それほどまでにわれわれ人間に関わろうとしてくださる神である、そうしたことを知りえたことに深く感激した次第です。この神が、人間に対して、熱烈な想いを寄せて、人間を救おうとされ、愛してくださっていることを知りえたからです。

旧約聖書と新約聖書を一貫して流れている中心思想は、出エジプトを実現させる際に、神がモーセに対して告げたその強い意思、愛の思い、それが十字架上で、独り子をも惜しまずにそのいのちを人に捧げた、その神の愛に結実していると考えられるからです。わたしたちを救済する神の決然たる意思が、「独り子を給うほどに」という言葉に象徴されているように思えてなりません。

おわりに、エマオへの途上で語られたキリストの言葉を引用して締め括りとします(ルカによる福音書24章25節～27節)。

そこで、イエスは言われた。『ああ、物分りが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。』そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。(新共同訳)

おわりに

聖書は靈感に導かれて書かれた書物だとされています(テモテへの手紙二3章16節)。原典を読むと、文法的に説明のつかない箇所がたくさんあることにも気付かされます。そこにも靈感が働いているのだろうかと思ったことが、幾度かありました。そこにも何か特別な、隠された意味があるに違いない、と

感じてきた次第です。

わたくしの聖書に向かう姿勢は、様々な方との出会いを通して、創られてきたように感じています。謎解きのような気持ちで、聖書本文の背後にある世界に関心を向けるようになったのは、一人の牧師先生との出会いからです。いつも神は愛なりと説教するのが常であったこの先生は、広島で被爆され、ご家族を失われた方でした。この先生から洗礼を授けられたからです。どうして神は愛であると説教なさるのか、その謎の究明を求めるわたくしにとって、先生が手に持っておられた聖書のテキストが、わたくしをがっかりさせたことは一度もありませんでした。聖書本文は、常に新鮮な喜びを与えてくれました。感動させられ続けたのです。そうした人との出会い、また聖書との出会いを、心から感謝している次第です。

フェリス女学院大学のキリスト教研究所の発足をお祝いすると同時に、ますます発展をすることを願ひ、わたくしの話を終えたいと思います。ご静聴を感謝いたします。ありがとうございました。

(すずき・よしひで)

フェリス女学院学院長